

2015年度 第1回 「平和を考える集い」を開催

戦後70年の節目を迎え、改めて平和の尊さを確認し、これからの平和社会を志向する起点として、昨年より連続して開催している「平和を考える集い」を、6月10日、かでの2.7において約550名の参加のもと開催した。

冒頭、主催者挨拶にたった出村良平事務局長は、特定秘密保護法や憲法解釈変更による集団的自衛権行使容認の閣議決定、これに基づく諸関連法案改正の動きにふれ「衆院で行われた憲法審査会でも、自民党が参考人として呼んだ憲法学者ですら法案は違憲であると明言している。世論調査でも多くの方が反対している状況にある。連合北海道としてもこの法案を成立させない取り組みを強化していく。」と述べた。



引き続き、大江健三郎さんより作家人生において経験したことや回顧を通して、さまざまな思いが語られた。その中で「1945年に敗戦を迎え、軍国主義の社会から1年か2年で民主主義教育が変わっていった。生活面でも個人の権利があり、近代化の中で非常にめずらしい時代であった。」と当時を振り返り、民主主義の息づく社会の重要性についてふれた。また、チェコの作家ミラン・クンデラの作品とご自身の思いを重ね合わせながら語られた中で、「これまで人間が生きてきた場所を、次の世代の子どもたちが生き延びることの出来ない場所にしてしまうこと、それは自分達人間としての、根本的、本質的なモラルティ（倫理・道徳）に反するという。この人間としての本質的なモラルが、それなしでは人間らしく生きていくことができない、その一番中心的な最後の条件となるものだ。次の10年の間に、次の世代が生きていく場所を残し続ける、私たちが文化を作る場所を守り抜く、これを最大の目的にすべき。」と、これから私たちが進むべき将来の姿について示された。

連合北海道は、今後もこうした学習会を開催し、広く道民の方々と連携し、平和で民主的な社会の実現に向けて、組織の総力をあげて平和運動を展開していく。

